

城下町成立の頃③

第9回

寛永十七年(1640)池田輝澄が因幡国鹿野へ蟄居となった後、和泉国岸和田から松井康映(やすてる)が藩主として入封してきます。六万石の内佐用の一万石を弟たちに分与したため、五万石の領地となります。康映の祖父康親は三河国生まれで、家康に従って武勲を立て松平姓を許され、さらに家康の康の字をもらい、以後、代々康を通字として名乗りました。

山崎に入封した松平周防守康映は町の東・西・北に入口の木戸の設置や、侍町と町場を区分けするため土橋門・大手門・角鷹(くまたか)門を設け、番所を置いて門番を居住させました。

元禄十二年(1699)に書かれた『宍粟郡守令交代記』には松井の家風を、「戦国の余風によ、質素の風ありて、武勇、自然のたしなみありて、且、礼文の風あり。」とし、武道が盛んで、武骨のきらいはあるが、礼儀正しく、領民への善政を敷いたことが記されていて、その様

子を「当地の繁栄、この時にあり」とまで、著者の片岡醇徳は形容しています。その康映は、慶安二年(1649)石見国浜田へ所替えになり、この地での統治はわずか十年で終わります。

同年に岡山藩池田氏から宍粟藩初代の藩主池田輝澄の長兄利隆の次男になる備後守恒元が、前藩主康映の五万石の内、千種川流域を除く三万石の領地を受けて入封します。この時点で、宍粟郡の一円支配は終わり、千種川流域は幕府領となります。恒元は父の池田利隆の戒名・興国院殿をとって上寺の空き寺を興国寺とし、菩提寺としました。恒元は寛文十一年(1671)に没するまで二十三年在任し、この頃のことを前述の守令交代記には「惣して、家中理不尽の風なし。町・在安樂せり。」と評しています。

恒元の跡を嗣子の政周(まさちか)(後に政元)が継ぎますが、六年後の延宝五年(1677)に江戸で没します。政周には後継ぎがなく、養子に次郎丸(数馬II恒行)を迎え、家名と藩地が相続されました。池田数馬は齢わずか六歳で藩主になったのですが、翌年に江戸で亡くなり、宍粟藩池田氏は断絶となりました。

延宝七年(1679)三万石は幕府領となりますが、同年六月に一万

石余が大和郡山の本多政貞(改メ忠英)に与えられ、十月に山崎へ入ってきました。本多氏は「本多氏中興の主」といわれる平八郎忠勝が有名で、忠勝は若くして徳川家康に仕え、徳川四天王の一人と呼ばれました。

この本多氏が、初代忠英から八代忠鄰(ただちか)が明治維新を迎えるまで百九十年間続くこととなりました。

宍粟郡内には幕府領が多いですが、元禄十年(1697)に三日月藩ができ郡内で十八カ村が編入され、享保二年(1717)には安志藩が成立し十七カ村が編入、また明和六年(1769)には尼崎藩領ができて、三十一カ村が編入され、幕府領と複数の藩領が複雑に入り込む分割支配が明治まで続きました。



興国寺山門=池田氏の菩提寺

山崎郷土研究会長 大谷 司郎

おいでよ 図書館へ



年末年始の休館日

12月28日(土)から
1月4日(土)まで
1月5日(日)より開館します



今月のオススメ

歴史の愉しみ方

著者・合戦・幕末史に学ぶ
忍者／磯田 道史

忍者の履歴書、江城の攻略法、竜馬暗殺の黒幕考察など、著者自ら全国を訪ね歩き、古文書を読み調べた本物の歴史が満載です。「武士の家計簿」の著者です。



名軍師ありて、名将あり

著者／小和田 哲男

秀吉に天下を取らせた黒田官兵衛、情厚き知将・竹中半兵衛、義を貫いた策士山本勘助…。名将を陰で支えた戦国時代の軍師8人に光を当て、その活躍を紹介。

図書館カレンダー

□ 休館日

【開館時間】午前10時～午後5時30分

日	月	火	水	木	金	土
13	14					
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

編集後記

秋の行楽シーズンも終わり、季節は冬へと衣替え…。実は広報担当者にとって秋は行楽シーズンではなく「取材シーズン」なのです。今年取材シーズンで最も印象的だったのは11月10日の日曜日でした。安が事前に把握できた催しは、市内で何と10件!「さあ、どれに行こうか?…いや、どの順番で行こうか…」えと一緒に「作戦会議」です。もちろん他の部局や市民局などの応援もお願いしました。

そして当日。皆さん覚えていらっしゃるでしょうか。何と朝から雨降りのお天気だったのです!(泣)催しが目白押しだった11月10日、皆さんはどの催しを楽しまれましたか?

安

